



## 説教要旨「神の下僕か、下僕の神か」

使徒言行録7章37～53節

ステファノは、イスラエルの歴史そのものが、神に逆らい続ける歴史であり、今もそうであることを、かつての故事にちなんで論証します。かつて、イスラエルがエジプトから導き出されたとき、指導者モーセは神と契約を結ぶためにシナイ山に登りました。モーセが四十日四十夜山にいた間に、モーセの身に何か起こったと不安に駆られた人々は、新しい指導者と神を立てようとして、若い雄牛の鑄像を造り、それを礼拝したのです（出エジプト記32章）。

また、ステファノは神殿についても言及します。ソロモンが建てたエルサレムの神殿は、必ずしも神ご自身がそれを望み、要求されたものではなく、そもそも「いと高き方は人の手で造ったようなもの（神殿）にはお住みになりません」（48節）と主張したのです。この世界の全てを造られた創造主を、人間の手で造ったものに閉じ込めるようにすることはできません。しかし、天地の創造主を神殿に閉じ込めたことにして、自分たちの都合良いようにいつでも神を利用できるようにしたのです。いつでも自分たちの要求に応答する「便利な神」とし、神の下僕であるはずの人間が、主従を逆転させて、神を下僕としようとしているのです。

指導者であるモーセが山に登っていったままいっこうに戻ってこないために、不安に駆られて目に見える神を自分たちの手で造ろうとしたイスラエルの民も、神殿に神を閉じ込めた気になって、神殿そのものを偶像として拝むようになっていった人々も、どちらにも全知全能の神への信頼が決定的にかけていました。

下僕であるはずのわたしたちを救う為に、この神は、その独り子をこの地上に遣わし、十字架へと歩ませました。この地上に来てくださったその独り子、イエス様は、弟子たちにまで裏切られながら、孤独に、悲惨な十字架への道を歩み通してくださったのです。見通せない先行きに不安を覚えます。けれども、はかりも知れない神の愛は確かです。この世界の全てをその手の中におさめておられる全能の神の愛に信頼して、共に歩いて参りましょう。